

一

問一

愛という言葉は、日本では不義のニュアンスが強く、清純な意味を含まないのに対し、西洋では好むと同じ意味で捉えており、切支丹が神やキリストの愛を日本語で説く際に、愛という語が使えず、苦心して「大切」という語の発明に至ったということ。

問二

日本の言葉は、明治以来、言葉の意味とそれを日常で使う際の人々の心情の対応がまちまちであり、同義語が多様で境界線の不明瞭な言葉が多く、雰囲気的でありすぎること、日本人を万事雰囲気だけで済まして良いような気持ちにさせるという考え。

問三

一語の使い分けで物事を簡明瞭に区別する日本語の利点、物自体の深い機微、独特な個性的な諸表象の見逃しと、物自体に即して正確に表現を考えることの軽視につながるという懸念。

問四

ほんとうのことは不変の、あたり前の事実であるだけで、それ以上の意味を含まず、ただ勝手にそうすればいいだけのことであり、素朴な、特に言葉で表現する必要のないことにすぎないから。

問五

恋愛は本能の世界から文化の世界へ引き出し、個人の努力で作るところに問題があり、その心情には無数の差がある。恋愛について考え、小説を書く意味は、それ自体に即した正確な表現を考え、自身が自分自身だけの解答を探し続けることにある。

二

問一

夕顔の花の美が花の形状等目前に見る写生趣味と歴史的連想即ち空想的趣味との上にあると考える者は、空想的感じが全く消え去るという子規の言葉に納得がいかなかったから。

問二

古人の詩歌、事跡、その他種々の連想を有意識もしくは無意識に想起するという空想趣味の働きを欠くと、写生趣味は詩趣の有無の判断ができず、目前に在る無数の事実を写した浅薄な作句になり、新趣を生むのではなく、かえって妨げになるということ。

問三

春雨が降る際の無限の事実から、春雨と調和し、濃艶な詩趣をもたらす事実だけを選別する想起は、古人が着実に蓄積してきた連想であり、人が自然から感受しうるものではないということ。

問四

文学芸術の革新運動は、旧弊を打破し、陳腐さを刷新することが過剰になると、勢い余って、旧弊だけでなく、歴史的に継承され洗練されてきた善い趣味が損なわれる危険があるということ。

問五

旧弊の打破刷新に急進的だった新派俳句の運動も、歳月を経ると、打破した歴史的な空想趣味の価値に気づかされ、刷新の成果も結局、古人以来の歴史的な空想趣味の上に新たな趣味を加えただけで、その蓄積に一役を担ったことに気づくということ。

問一 A 筆者の、式部卿のみこが、学識は拔群であるのに、幼い時から物の怪をわずらっていつも病気がちであったので、皇太子になれなかったことを残念に思う気持ち。

B 式部卿のみこの、昔から出家の念願をかなえたい気持ちが強かったけれども、普段は病気に妨げられてばかりで、出家できずに過ごしてきたことを残念に思う気持ち。

問二 式部卿のみこが吉野の阿闍梨のもとに赴きなされたのは、有名な吉野の山の桜の花盛りを見たくお思いになって、だいたいはその気持ちに促されなさるからであった。

問三 出家することならばこのような山にもずっと籠もって、俗世に二度と戻らないのが、心も安らいで、仏道修行も専心でき極楽往生もきつと期待できるに違いない。

問四 吉野の山の桜が春を待ち迎えて今年はさらに色も濃くみごとに咲いたように、式部卿のみこをお迎えてきて晴れがましく、吉野の山奥で長年仏道修行して過ごしてきたかいたが、あったと光榮に感じる気持ち。